

2014年12月末 2015年3月号掲載

季語つれづれ番外(一) 「水室」用 尾池和夫

【鴨かも】 真鴨 鴨の声 鴨の陣

「あれは鴨でしょうか?」「いや、鴛鴦じゃない?」というような会話が吟行地でよく聞かれる。

東京の大手塚にある「カモ類」の説明に「お塚には秋の深まりとともに、キンクロハジロやハシビロガモ、オシドリなどのカモが訪れて、冬を過ごします。春になると、子育てのために旅立ちます」とある。

『角川合本俳句歳時記第四版』には「鴨」という季語の説明に「鴨は雁と同じガンカモ科に属しているので、形や習性が似ている。鴨類のうち、真鴨・小鴨・葭鴨(よしがも)・尾長鴨・嘴広鴨(はしびろがも)などは河川や湖沼で、鈴鴨・黒鴨などは海上・江湾・荒磯などで見られる。秋、雁と同じところに飛来し、春に北方に帰る。(中略)鴨は冬の間狩猟が許されている」とあって、さらに「鴛鴦」という季語の説明に「ガンカモ科の留鳥で、山間の溪流や山地の湖などに棲息しており、雄の美しい色彩によって知られている。(中略)鴛鴦は留鳥だが、ほかの水鳥にまじって、冬に見かけることが多いので、冬の季語となっている」とあるので、俳人たちにとっては「鴨」と「鴛鴦」とは異なる鳥である。

分類学で、カモはカモ目カモ科の鳥類の中で、大きさが

雁以下、首が短く、冬の繁殖羽で雄雌の色彩が異なるものの総称とされており、カモという名称の群は存在しない。大手塚の説明は、この分類学上の説明である。

鴨鍋は葱と煮る。昔は芹と煮て臭みをとったという。真鴨は冬、脂が載ってとても美味しい。葱を背負って来るのはこの真鴨であるはずだが、最近、アヒルか合鴨で済ませることも多い。

2015年1月末 2015年3月号掲載

季語つれづれ番外(二) 「氷室」用 尾池和夫

【酢茎】

『角川合本俳句歳時記第四版』には主題の表記がこのようになっており、説明は「蕪の一種の酢茎菜を塩漬けにしたもの。京都の特産である」とある。また、例句の中では、井上弘美さんの句だけが「酸茎」という字を使っている。

京都の人は「酸茎」あるいは「すぐき」という字を使い、「酸茎菜」という名前が京野菜である。京都の漬けものを紹介するときには、「すぐき」は、「蕪の変種の酸茎菜を塩だけで漬け込んだ、日本では珍しい乳酸発酵の漬け物で、冬の季節限定のもの」というように書く。地元の人々は、酢茎とは書かない。漬け物の袋などには「すぐき」とあり、説明には酸茎菜を漬けたとある。

ウィキペディアの「すぐき」には、「すぐき（酸茎）、または酸茎漬」とあり、「京都市の伝統的な漬物（京漬物）の一種。カブの変種である酸茎菜、別名酸茎蕪の葉とかぶらを原材料とする。現代の日本では数の少ない本格的な乳酸発酵漬物で、澄んだ酸味が特徴」というようにある。「酢茎」という単語はどこにも出てこない。同じく「京野菜」の項を見ても、やはり「酸茎」が入っている。

ところが、季語の説明を検索すると、「酢茎」という単語がたくさん出てくるが、その説明のウェブサイトに紹介されている「しば久」の説明が「上賀茂名産すぐき漬(酸茎菜)」となっている。その後に出てくるそうそうたる俳人の詠んだけ例句は「酢茎」というような文字が使われている。これを見ていると、どうやら「酢茎」という字をはやらせたのは、俳人ではなからうかと疑いはじめた。

二〇一四年一月七日に上賀茂神社で行われたのは、J A上賀茂支店の「京の上賀茂すぐき倶楽部」の農家約二〇人が参加して、約三〇キロのすぐきを詰めた樽を担いで、無事に収穫が済んだことへ感謝し、来年の豊作を祈願した。それは「すぐき奉納」であり、初漬の「すぐき」を神前にお供えして感謝を捧げたのである。一の鳥居から、神職、巫女、先太鼓、すぐき神輿が二基、二の鳥居をくぐって境内に入り、最後は「すぐき」を参道の人たちに配った。

以上のようなことから結論として、珍しい乳酸発酵の酸味が一番の特長であるから、「酸茎」という字をあてるべき

だという説を、私は採ることにした。ただし、商品に使われている「すぐき」という表記も大切にされた方がいいと思っている。

2014年12月末 2015年4月号掲載

季語つれづれ番外(三) 「氷室」用 尾池和夫

【桜】 夜桜 里桜 薄墨桜

熱海にあるヒマラヤ桜の特徴は、広い三角形の五枚の萼である。ヒマラヤが起源と考えられており、一月には蕾が膨らみ、冬にみごとな花が咲く。花には蜜が多く、果実は大きく食用になり、幹からガムが採れ、また、種はアクセサリーになっている。

ネパール国から贈られたこの桜の現存する原木は、県立熱海高等学校校門前下の法面と、月見が丘公園に一本ずつあり、若木は熱海市内に数本ある。

ヒマラヤ桜は二酸化炭素や窒素酸化物の吸収率が、染井吉野の五倍ほどあり、将来が注目されている。このヒマラヤ桜のことは、東京農業大学の染郷正孝さんが書いた「サクラの来た道」に詳しい。

神話では、桜は木之花咲耶姫が富士山頂から種を撒いて広まったとされている。染井吉野の花がよく付くのは樹齢一五年から五〇年、しかも管理が必要である。葉から増や

すので、全国の染井吉野がクローンで、同じ気候条件で一斉に咲く。江戸彼岸をもとに昔京都で生み出された枝垂桜は長寿で、全国に名木が多い。

沖縄では緋寒桜の花見を愉しむ。この花は風雨に負けず長く咲いた後、花ごと落ちる。沖縄では緋寒桜が咲くのに必要な寒さが足りず、寒波の南下を待つて咲くので、桜前線が沖縄本島北部から離島へと南下する。

2015年3月末 2015年5月号掲載

季語つれづれ番外(四) 「氷室」用 尾池和夫

【夏の潮】 夏潮 青葉潮

青葉のころの黒潮のことを夏潮とか青葉潮と呼ぶ。

【青葉】 青葉寒 青葉冷 青葉時雨

若葉と同じく樹木の緑が深まる季節。青葉時雨は雨の上がつた後の雫が落ちてくる様子をとくに指す。

【初鯉】

夏潮に乗って鯉が北上して、遠州灘から伊豆を廻る頃、脂が乗って美味い。初物好きの江戸っ子が手に入れて自慢する。一八一二年、中村歌右衛門は初鯉を一本三両で購入したという記録が残っている。

初鰹は港によって時期がずれる。食品業界では高知県の初鰹の時期で毎年の初鰹と決める。生きた片口鰯を餌にして釣るが、高知の鰹漁は疑似餌の一本釣りで豪快である。

【鰹】 松魚 鰹釣 鰹船

鰹は黒潮と親潮が会う三陸沖まで北上し、秋、親潮の勢いが強くなるとともに南下する。戻り鰹と呼ばれ低い水温で脂が乗ると秋の味である。

鰹は、この一種だけでカツオ属 (Katsuwonus) を構成するのが特徴である。鰹は死ぬと縦縞が出るが、絵にはよくこの縦縞が描かれている。

時速六〇キロで泳ぎ回る鰹は、優れた蛋白質を持ち、レバーに匹敵するビタミン類がある。DHAを多く含むから、脳細胞の学習能力を高める効果がある。

2015年6月末締切 2015年7月号掲載予定 (不採用)

季語つれづれ 番外 (五) 尾池和夫

【祇園祭】

祇園祭の元となった祇園御霊会の起源は、貞観一一年である。全国に流行した疫病が、素戔鳴尊の祟りであるとして、勅命により、六月七日、全国の国の数である六六本の鉾を立てた。六月一四日、洛中の男児が神輿を奉じて神泉

苑に集まって御霊会を修した。今の還幸祭は、この六月一四日の、神泉苑に神輿を送ったことを起源としている。祇園祭は神幸祭と還幸祭の神輿渡御に本質がある。

同じ年、東北地方に巨大地震があり、大津波による災害があった。祇園祭と貞観の大津波との時間的な関係から、両者に深い関連があったという考え方が成り立つ。当時、形を整えた街を構成する地域は、京、東北の多賀城、九州の大宰府だけであったから、多賀城の被害は京にも大きな影響を及ぼしたにちがいない。

まず、史実を時間順に並べてみることから始めたい。貞観一一年五月二六日（グレゴリオ暦七月一三日）、陸奥国東方沖の海底を震源域とする巨大地震が発生し、津波による甚大な被害があった。その前後、日本列島は大地震と火山の噴火が続く、大地の活動期であった。その歴史は、日本の正史『六国史』の六番目、『日本三代実録』にある。

八五〇年、出羽国地震、八六三年 越中越後地震、八六四年富士山噴火、八六四年阿蘇山噴火、八六七年鶴見岳、阿蘇山噴火、八六八年山崎断層地震、そしてこの八六九年貞観地震である。

さらに続いて、八七一年鳥海山噴火、八七四年開聞岳噴火、八七八年相模武蔵地震、八八〇年出雲地震、八八七年には、南海トラフで仁和の巨大地震が起こり、八九三年、白頭山が噴火して東北から北海道にまで降灰があった。

ところで、貞観地震と御霊会の時間的な関連である。貞

観一一年五月は小の月だから、鉾を立てた貞観一一年六月七日は貞観地震から一〇日目になる。京と緊密な関係にあった多賀城は、「京を去ること一千五百里」とあるから、おそらくは五日くらいで知らせが到着したであろうと思われる。陸奥国で起きた災害を知った朝廷は、御霊会の勅令を発することができたのである。

牛頭天皇はどうやら地震と縁が深いようである。祇園祭の前年に起こった山崎断層の地震で、播磨諸郡の官舎や諸寺の堂塔が崩れ、京都でも被害があった。その後、牛頭天王が姫路（兵庫県）の広峯神社から京都に迎えられた。一方、貞観地震の翌年、名取（宮城県）の清水峯神社に、広峯神社から、また牛頭天王が移された。偶然にしては、いささかできすぎている。

ところで、現在の祇園祭の日付は、さまざまの変遷を経て決まったようである。旧暦明治五年一月二日、翌日を新暦六年一月一日とすると、突然に決められた。それは、明治政府では役人の報酬が月給で定められており、旧暦の明治六年は閏月があつて一三回の月給を払う必要があることに政府が気づいたからである。祇園祭の日付はその余波を受けて、かなり乱れてしまった。旧暦六月七日、一四日の祇園祭は、明治六年以後、かなりばらばらに行われ、明治二年からは、七月一七日と二四日になった。

ついでながら、貞観地震の時代の地震や噴火の歴史が記録された『三代実録』を編修したのは、菅原道真たちであ

った。菅原道真は、貞観二年に一五歳で元服、一八歳で文章生試験に合格、貞観九年、文章生中で特に優秀な文章得業生となり、方略試（議政官資格試験）を受ける資格を与えられたという。方略試受験は、三年後の貞観一二年に行われ、「氏族を明らかにせよ」という問題と「地震を弁ぜよ」という問題が出された。大学者の都良香による採点で「中の上」という成績により及第した。

このような、国の最上級職を争う人たちのための試験問題から見ても、試験の前年に貞観地震が発生するまでの日本列島で、地震や噴火がたいへん目立つ現象として認識されていた状況が、十分に伝わってくると思う。

2015年6月末締切 2015年7月号掲載

季語つれづれ 番外（六） 尾池和夫

【紫陽花】 あぢさゐ 四葩 七変化

ユキノシタ科の落葉低木の花である。額紫陽花を原形とする日本原産種である。花びらに見える萼の中に粒状の花をつける。

まず、紫陽花について知っておかなければならないことは、有毒植物であるということである。

原種の額紫陽花は、伊豆半島、足摺岬、南硫黄島などで海岸に自生する。高さは四メートルに達することもある。

種子ができるのはまれで、挿し木や株分けで増やす。日本から中国へ伝わり、一八世紀にヨーロッパへ伝わり、園芸品種がたくさん作られた。シーボルトがオタクサと命名したと紹介されているが、学名としては使われていない。

季語で紫陽花と書く名前の標記は、白楽天の造語と言われているが、それについては、牧野富太郎が『植物一日一題』に次のように書いている。

「私はこれまで数度にわたって、アジサイが紫陽花ではないこと、また燕子花がカキツバタでないことについて世人に教えてきた（中略）そして俳人、歌人、生花の人などは真っ先きに猛省せねばならぬはずだ」「元来アジサイは日本固有産のガクアジサイを親としてそれから出た花で断じて中国の植物ではないから、これが白楽天の詩にある道理がないではないか」「そしてこのアジサイを日本の花であると初めて公々然と世に発表したのは私であった。すなわちそれは植物学上から考察して帰納した結果である」

俳句では植物名を漢字で書くよう心がけるが、漢字名の由来を調べていくと、複雑な歴史があつて、真相がわからなくなることもある。紫陽花の名もそのような歴史を持つ一つなのであろう。

2015年8月末締切 2015年9月号掲載

季語つれづれ 番外（七） 尾池和夫

【猿酒】 ましら酒

昔からの言い伝えでは、山中の猿が、樹木の空洞や岩穴に木の実を蓄え、やがて発酵した酒と言われるが、実際に見た人は少ない。

歳時記には、新酒、今年酒、濁り酒、どぶろく、古酒などとともに秋の生活の項に並ぶ。今では、三〇年もの大吟醸の古酒などもあり、そのふくよかな味わいは名句の登場を待つ。

京都大学霊長類研究所では、アフリカのギニアでチンパンジーの研究を続けており、やさしい読み物もウェブサイトに連載されている。その研究所から興味深い研究成果が二〇一五年六月に発表された。ギニアのボツソウ村の人たちが椰子の木に傷をつけて得た樹液を自然に発酵させて造った酒を、野生のチンパンジーが、二〇回も飲むのを観察して、その結果を論文にまとめた。野生動物が習慣的に飲酒することが初めて確認されたのである。

霊長類研究所の松沢哲郎さんは、チンパンジーは人の仲間と猿とは違うと言いつつ、チンパンジーを数えるときには「人」で数える。チンパンジーが酔ったかどうか分からないが、中年の雌が気持ちよさそうに歩いて去ったと、松沢さんは語った。ちなみに椰子の酒を飲んでいたのは、六歳を含む、延べ五一人のチンパンジーだったという。

2015年9月末締切 2015年10月号掲載

季語つれづれ 番外(八) 尾池和夫

【八朔】

旧暦八月朔日である。秋分の日が旧暦八月であり、早いと八朔は秋分の二九日前、遅いときは秋分の日となる。早稲の穂が実り、農家では「田の実の節句」と呼んで初穂を贈る。それに由来して「頼みの人」に感謝する意味から贈り物をする習慣が武家や公家にもあった。また、徳川家康が天正一八年八月一日に初めて江戸城に入城した日でもあり、江戸時代、武家では元日に次いで大切な記念日だった。

夏井いつきさんの『続絶滅寸前季語辞典』にも掲載されていて、漁村で育った夏井さんが農家に来て八朔の行事に出会ったが、農家で暮らせたのも歳時記のおかげだったと書いている。

八朔祭は全国にあり、熊本県山都町浜町の巨大な「造り物」が毎年全国ニュースになる。京都の祇園では、新暦八月一日に芸妓や舞妓がお茶屋や師匠に挨拶廻りをするのでカメラが並ぶ。

氷室俳句会で吟行地を下見するため、今年九月六日に松尾大社を訪問したときが八朔の祭だった。祭は九月第一日曜日に行なわれ、前夜に京都で最後の盆踊り、当日には赤ちゃんの土俵入りがある相撲、女御輿、酒樽の子供御輿、

無形文化財の六齋念仏踊などがある。訪ねたとき女御輿は出発していたが、境内に店が並び、人びとが慌ただしく行き来して賑わっていた。

『氷室』2016年2月号掲載

季語つれづれ 番外（九） 尾池和夫

【鯨】 勇魚（いさな）

鯨は哺乳類であり小型のものを海豚と呼ぶ。白長須鯨は体長二五メートル、現存の動物で最大である。長須鯨、鰯鯨、座頭鯨などがある。抹香鯨は十数メートルの大きさで、腸の結石から竜涎香（ルビィりゆうぜんこう）という香料を採取していた。

鯨類の利用は多岐にわたる。鯨油は特に工業技術の立役者であり、宇宙船は鯨の脳みそから採った最高品質の不凍油を使い、宇宙空間でロボットアームなどにも使ったという説が伝わっているが、最近では使っていないとNASAが説明しているようだ。

鯨肉も重要な用途である。部位の呼び名が豊富で、それぞれにさまざまな調理法がある。鯨は魚とされていたから日本でも魚肉と位置づけられて古くから食用とされてきた。

日本人だけでなく昔、英国のヘンリー六世と七世は鯨が好物で、鯨肉は王侯貴族の高級食材であった。英国の古

い法律用語でも鯨類をロイヤルフィッシュと言った。エスキモーには鯨肉食文化があり、国際捕鯨委員会で先住民生存捕鯨が認められている。皮下脂肪付きのマクタクを口の中で噛み続ける。

赤身は低脂肪、高タンパクで鉄分が多い。絶食状態でも長距離を泳ぐことのできる鯨の肉には、きっと素晴らしい成分があるにちがいない。

『氷室』2016年3月号掲載

季語つれづれ 番外(二〇) 尾池和夫

【捕鯨】 勇魚取 捕鯨船

鯨が冬の季語であり、捕鯨も冬の生活の季語である。縄文時代から日本では鯨を利用していた。江戸時代の初めからは組織的な捕鯨が、紀州、土佐、長門、肥前などで行われた。

例えば土佐では江戸前期の慶安四(一六五一)年、土佐藩安芸郡の代官であった尾池義左衛門の報によって、尾張から尾池四郎右衛門(政次)が鯨船六隻を率いて土佐に入り、藩主の許可のもとに津呂と幡多郡佐賀に漁場を設け、尾池組を組織して冬春交代で捕鯨を行ったと、郷土史家の平尾道雄さんが『土佐藩漁業経済史』に記している。私は小学校の頃、この平尾道雄さんの隣に住んでいて、ときど

き話を聞いた。

近代では船団による南氷洋捕鯨が行われた。現在、調査捕鯨と沿岸の小型鯨の捕鯨とが行われている。

ヨーロッパでは、紀元前約二二〇〇年頃の石器時代の捕鯨の壁画があり歴史が古い。英国には現在でも有効な法律があり、海岸で鯨の死骸が発見されると頭部は国王の、尾部は女王のものになる。

ノルウェーは商業目的で捕獲できる鯨の数を独自に設定している。アイスランドの捕鯨船は絶滅危惧種の長須鯨やミンク鯨を捕る。カナダ、フィリピン、トンガなどのように国際捕鯨委員会に非加盟の国もある。また、アメリカ、ロシア、デンマークなど先住民生存捕鯨国もある。

『氷室』2016年4月号掲載

季語つれづれ 番外(一一) 尾池和夫

【春雷】 春の雷 初雷 虫出し

春に鳴る雷は夏の雷と異なり単発のものが多い。立春の後の初めての雷は初雷と呼ぶ。啓蟄の頃の気圧が不安定な気象条件の時に見られる現象なので、虫出しの雷、あるいは単に虫出しと呼ぶ。雹を降らせることがたまにあるが、夏の雷のような激しさは起こらない。

春は前線をともなった低気圧が日本付近を頻繁に通過す

る。さらに大陸からの冷たい気流が南下して、低気圧に伴う暖かい気流と合流すると、低気圧の急速な発達、あるいは前線活動の活発化が起こる。

春の雷は活動の活発な寒冷前線に伴う雲の中で発生する。風が強まり地上付近の気温が低いために、雹が降ることがある。

本州付近が移動性高気圧に覆われると、広い範囲で晴となるが、春は日本列島の上空の偏西風が強いために移動速度が速く、何日も覆われることはあまりない。このため、春の晴天は三日と続かず、天候の変化が早い。「春に三日の晴れなし」と言われる。

五月になると雹が降りやすくなる。雹は直径五ミリメートル以上の、氷の粒が大きくなった塊である。積乱雲の中で、上昇したり下降したりを繰り返して成長し、ある程度大きくなると重さで落下し、農作物やビニールハウスに被害が及ぶ。冬は気温が低く、氷の粒が直径五ミリ未満で霰になる。ちなみに、雹は夏の季語、霰は冬の季語である。

『氷室』2016年4月号掲載

季語つれづれ 番外(一一) 尾池和夫

【三寒四温】 三寒 四温 四温日和

大陸性気候の厳寒の頃の特徴として、中国の東北地区や

朝鮮半島の北部で言われる言葉である。三日間厳しく寒い日が続いたあと、四日間寒さが少しゆるくなるという現象を表現した言葉であり、季語としては厳寒の時期の季語だと覚えておく方がいい。

三寒の日は晴れ、四温の日は天気が悪いのが一般的と言える。シベリア高気圧の強さが七日周期で変動することによるが、日本列島まで来るとシベリア高気圧の変化だけでなく太平洋高気圧の影響もあり、七日周期ははっきりしなくなる。よく説明で言われているような、春先に三日寒く四日温かい、というような変化は、日本列島の気象のデータからはほとんど見られない。気象庁の気象用語にも、三寒四温という言葉は採用されていない。

日本列島では、真冬の三寒四温は明瞭でないが、春先になって四日周期の気温変動が見られる。移動性高気圧が通過して気温が上昇するのが一日目、低気圧が来て雨となるのが二日目、三日目は晴れて西風が吹いて寒くなり、四日目には移動性高気圧が近づいて気温が上がる。

この春先の寒暖の変化を三寒四温という文例も、時代とともに増えてはいるが、例えば広辞苑などでは、その例をまだ採用していない。やはり三寒四温は歳時記でも冬の季語とされている。

【沖繩忌】 慰霊の日

一九四五年六月二三日、沖縄は日米最後の決戦地とされ、多くの市民が犠牲になり、沖縄の日本軍は壊滅した。一九六二年から、この日、沖縄全戦没者慰霊祭が行なわれ、沖縄戦犠牲者の遺族や子孫などが集まり、正午に黙禱を捧げている。

この日、沖縄戦の組織的戦闘が終結したことになんで、琉球政府と沖縄県が「慰霊の日」を住民の祝祭日に関する立法に基づいて公休日と定めた。一九七二年、日本に復帰後、「慰霊の日」は、日本の法律による休日としての法的根拠を失った。一九九一年、沖縄県が条例で六月三日の「慰霊の日」を休日と定め、国の機関以外の役所や学校などが休みとなった。

島田牙城氏は、『里』（二〇一三年九月号）で、忌とは何かというテーマで、忌日のことを論じている。忌日は、ある人の死後、その人に尊敬の念をもつて寄り添いたいと願う大切な「個人の命日」である。「広島忌」「長崎忌」と言っても広島や長崎の命日ではない。多くの市民が殺された命日なのである。事件、事故、天災に忌を用いるのは誤用で、流布しているにしても、今後使うことはないという意を書いた。

この考えに従うかどうかは別だが、沖縄では梅雨の蒸し

暑い日が続いた後、六月二三日ごろ梅雨が明けて、青い空と青い海になる。この「六月二三日」を詠むことで、沖縄の人の思いを伝えることが可能かもしれない。

『氷室』2016年7月号掲載

季語つれづれ 番外（一四） 尾池和夫

【朝風】【夕風】

海岸地域で、夜の陸風から昼の海風へ変わる時、陸側と海側の大気が同じ温度になって風が止まるのが朝風である。逆に昼から夜へ変わる時、蒸し暑くなって風が止まるのが夕風である。気象庁で風力〇というのは風速毎秒〇・〇ないし〇・二メートルで、この時が風である。海岸地域でも、特に瀬戸内海のように山に囲まれている海では長い時間続く。

湖や池の周辺でも湖風という風があり、琵琶湖くらいの面積になると湖風と陸風の循環があることが確認されている。

陸は暖まりやすく冷えやすい一方、海は暖まりにくく冷えにくいので、昼は陸にある空気が海にある空気よりも速く暖められ、密度が低くなって浮力を受け上昇気流を生じる。地表付近では海から陸へ海風が吹き、上空で陸から海へ風が吹く。これを海風反流という。このような風の循環

は海風循環と呼ばれる。夜、日射が無くなると逆のことが起きて、上空では海から陸へ陸風反流が吹き、このような風の循環は陸風循環と呼ばれる。これらが入れ替わるときが風である。

風は時化に対して反対語である。椰木の葉は風に通じるので時化を嫌う船乗りの間ではお守りにされている。

風、凧、凧などは国字である。中国語には凧（テイ）、凧（オン）、止（シ）、鎮（チン）などの字があるが、風が止まるのを一字では表せない。凧は海に囲まれた日本列島に特有の現象で中国大陸には見られないのである。

『氷室』2016年月8号掲載

季語つれづれ 番外（二五） 尾池和夫

【山の日】

季語になるであろう日のことである。国民の祝日に関する法律の一部を改正する法律（平成二六年法律第四三号）が施行されて、平成二八（二〇一六）年から、八月一日は、「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」日として、国民の祝日の一つの「山の日」となった。

この法律の第三条には、国民の祝日は休日とするとあり、さらにそれが日曜日に当たるときは、その日後においてその日に最も近い国民の祝日でない日を休日とするとある。

これはわかる条文であるが、その次の第三項、「その前日及び翌日が「国民の祝日」である日（「国民の祝日」でない日に限る。）は、休日とする」というのが難しい。つまり、前日と翌日の両方が「国民の祝日」でそれらに挟まれた平日は休日となるのである。これは数年に一度、不定期に現れる。二〇一五年の敬老の日は九月二一（月曜日）、秋分の日は九月二三日（水曜日）、したがってその間の二二日は休日となった。

国民の祝日「山の日」を制定することを求めてきたのは、日本山岳会、すでに「山の日」を制定していた長野県などの地方自治体、自然保護団体などであった。

この法律は二〇一四年に決まったが、この年の二月にはすでに二〇一五年のカレンダーができていたので、山の日とは二〇一六年から実現することになった。明治に突然改暦して大混乱というような事態は、今回はなかった。

『氷室』2016年月9号掲載

季語つれづれ 番外（二六）

尾池和夫

【台風】 台風の眼

颱風とも書く。北西太平洋や南シナ海（赤道以北で東経一八〇度より西、一〇〇度より東）に存在する熱帯低気圧のうち、中心付近の最大風速が毎秒一七・二メートル（三

四ノット、風力八）以上のものを指すというのが気象庁の定義である。台風の眼は、「台風の中心付近で風が弱く雲が少ない部分」と用語の解説にある。

「熱帯低気圧」は、熱帯または亜熱帯地方に発生する低気圧の総称で、風の弱いものから強いものまでであるが、気象情報で「熱帯低気圧」という場合は、台風に満たない、低気圧域内の最大風速が約一七メートル未満のものを指している。

沖縄言葉では「カジフチ（風吹き）」や「テーファー（台風）」という表現がある。

古文にある「野分」は暴風を指し、気象学上の台風とは概念が異なる。明治の初めにはタイフーンまたは大風（おおかぜ）と表していた。明治末頃、岡田武松によって颱風という言葉が生まれ、一九五六年の書きかえ制度で台風となった。

タイフーンの語の由来は、ギリシア神話に登場する巨大な怪物テュポンであるという説が有力であろう。

現在の台風予報は、「台風予報の図表示方法の指針」に沿った内容で、実況と三日先までの予報である「台風情報」と、二四時間先までの「台風の予報」とが発表されるが、予報を超える風が吹くこともあるので注意が必要である。

季語つれづれ 番外（一七） 尾池和夫

【茸】 菌（きのこ） 椎茸 毒茸

大型の菌類を呼ぶ俗称で、茸や菌の字を「きのこ」と読んだり「たけ」と読む。菌類が孢子形成のために複合的な構造を形成するが、とくに大型のものを茸と呼ぶ。一抱えもある巨大なものもあるが、すべて菌糸からできている。

古くは草片（くさびら）と呼ばれていた。狂言にも、屋敷に茸が生えて、山伏に祈禱を頼むけれど茸が増え続け、動き回るようになる演目がある。松茸は「万葉集」に詠まれ、平茸は「今昔物語」や「平家物語」に出てくる。

滋賀県栗東市にある菌（くさびら）神社は、茸を祀っている。六三七年ごろの大飢饉のとき、茸で人びとが救われた。水木しげるの著書では、飢饉の時に森から「クサビラ神」という妖怪が現れる。怖いが付いて行くと大量の茸に出会える。

茸には種がなく、朽ち木や枯れ葉から養分を取って胞子が増える。温暖かつ湿潤な日本列島によく合っており、日本には六〇〇〇種を超える茸の種類があり、茸と付く単語を採すとすぐ七〇個ほど見つかった。

椎茸や松茸を初め、日本では食べる茸が多いが、猛毒の茸もある。火炎茸（火焰茸）は、鹿の角の形で真っ赤である。猛毒で食べると死亡率が高く、触るのも危険である。月夜茸は緑に発光して夜の観賞用として優れている。秋、

山毛櫨の枯木に群生し、若いうちは平茸や椎茸などによく似ていて誤食されやすいので中毒がもつとも多く、死亡例もある。

『氷室』2016年月12号掲載

季語つれづれ 番外（一八）

尾池和夫

【橡の実】 栃の実

光沢のある黒褐色の大きな種子が美しい。種子の澱粉の灰汁は強いが、晒して餅や団子を作る技術が伝わる。灰汁抜きには手間と時間がかかる。各地方や家庭で受け継がれるコツがあり、それを習わないと、灰汁抜きは難しい。完璧に抜くのは困難で、橡の餅の独特の苦みを愉しむのである。

右城暮石の「橡の実の熊好む色してゐたり」の句があり、茨木和生の「橡の実を熊に残して拾ひけり」の句も好きで、京都大学の基本理念「地球社会の調和ある共存」を語るるときには、かならずこれらの句を引用して話してきた。

大学でこれを語ると議論になる。熊は橡の実に多く含まれるタンニンが嫌いで、橡の実を食べることはないという説が登場する。団栗にはタンニンが少ないので、熊は青い団栗だけを食べるという。要するに、人以外の動物が食べないので、飢饉の時などに人の非常食になったといわれる。

ある。

村には橡の巨木が大切にされており、熊は冬眠のための穴として使う。橡の巨木は目立つ。この巨木に登って橡の実を食べていけば目撃例や痕跡が見つかるはずで、実際には報告がない。団栗が茶色になって落果する時期になると、熊が木に登って団栗を食べる姿も観察されてないと言われる。

ところが最近、鹿が橡の実を食べるようになったという報告があり、北海道では蝦夷鹿も好んで食べているということも聞いた。しばらく橡の実の議論が続きそうである。

『氷室』2017年月6号掲載

季語つれづれ 番外（一九）

尾池和夫

【斑猫】（はんめう）道をしへ

ハンミョウ科の一種であり、赤、紫、緑などの斑点のある甲虫で地上にいる。後ろに立つと、飛び立って少し先へ行く。近くに行くともた飛び立って、道を教えてくれる。

古代中国の『神農本草経集注』という書物に出て来る斑猫は、猛毒の虫であるといわれ、斑猫が見るからに目立つ色彩を持つので有毒と誤ってしまいが、それは誤解で、古代中国の記述にある猛毒の虫は別の虫であるという。日本の季語にある斑猫の方は、きれいな色であっても無毒である。

中国古来の猛毒の「斑猫」とは、ツチハンミョウ科キオビゲンセイという虫で、これは致死量三〇ミリグラムのカントリジンという猛毒を体内に蓄えているという。これは日本にいないようだが、日本もいるヒメツチハンミョウは、糞むと黄色い体液を出して、それが皮膚に付くとただれる。『世界大百科事典』（第二版）の解説では、「金属光沢を放ち、地表から体を高く支える細長い胸脚と餌物をとらえる鋭い大あごをもつ」とあり「昆虫などの小動物を求めて地表近くを飛び、着地しては大きな複眼であたりをうかがう」とある。

日本の『和漢三才圖會』（一七一三年）に「斑猫」の見出しがあり、「倭の毒は外国のものほど強くない」とあり、さらに地面に降りたら振り返るといふ説明がある。『本草綱目啓蒙』（一八〇三年）には、何回も追うと道を外れると書いてあり、ずいぶんよく観察したと思われる記述がある。

『氷室』2017年月7号掲載

季語つれづれ 番外（二〇） 尾池和夫

【罌粟の花】 芥子の花 白芥子 ポピー 芥子畑

夏の季語である。ケシ科の一年草または多年草の花で、四月から六月にかけて、茎頂に、さまざまの色の一重や八重の花をつける。芥子という漢字は本来は芥子菜を指す。

罌粟の種子と芥子菜の種子が似ているため、室町時代中期に誤用されて定着した。

「罌粟坊主」「罌粟の実」も夏の季語であり、球形の実で風に揺れる姿から芥子坊主と言われる。

「罌粟の若葉」は春、「罌粟蒔く」は秋の季語で、季節ごとに登場する罌粟であるが、植えて楽しめる罌粟と、植えると処罰される罌粟とがある。種類によって阿片が採れるためで、栽培が禁止されている。観賞用に栽培できるのは、雛罌粟、鬼罌粟、アイスランドポピーなどである。

日本では *Opium poppy* など *Opium* 産生植物は「あへん法」で栽培が原則禁止されている種である。*Opium* はアヘンあるいは麻薬の意味である。この種には黄色がないという。

花が枯れると大きな実ができる。未熟果の表面に傷をつけてモルヒネを集め、乾燥すると生アヘンができる。精製モルヒネや、それから作るヘロインは麻薬であるが、モルヒネは鎮痛鎮静剤として重要である。

罌粟の実が熟すと天頂から「けし粒のような」小さな種子が飛び出す。けし粒を核として、銅鑼と呼ばれる鍋で金平糖を作るが、突起ができるまでには一週間以上かかるという。

『氷室』2017年8月号掲載

季語つれづれ 番外(二二)

尾池和夫

【金魚】 和金 琉金 蘭鑄 出目金 金魚田

金魚は室町時代に中国から伝わった。桶を天秤棒で担ぎ、呼び声で街を流す金魚売あるいは金魚屋も夏の季語である。

金魚が産卵したら親魚と隔離する。金魚は外敵から守るような場所に産卵するのだが、それを食べる習性がある。

金魚は鮡の突然変異を選択して観賞用に交配を重ねて作られた。染色体が多い四倍体性で遺伝的変異を起こしやすい。中国の緋鮡が改良されたものである。リンネは金魚を鯉の仲間に位置づけたが、DNA分析で鮡が先祖と判明している。浙江省が発祥の地とされ、皇帝や貴族の文化であるとして文化大革命では養魚家も金魚も大量に攻撃されて金魚の歴史は断絶したが日本の支援で復活している。中国語の発音が「金余」と似て、金が余るほどにという願いをこめて店先で飼う。

金魚は今五〇種ぐらいあると言われる。愛知の地金、高知の土佐金、島根の出雲南金などは県指定天然記念物である。金魚の特徴は尾の複雑な形だが、逆に鮡尾と言われるのもあり、ハート型の大きな尾に人気がある。

人の体温は金魚にはきわめて高温で、手で触ると体調を損なう。また、水はバクテリアで無害化されるので、水槽でバクテリアを繁殖させることも飼育にとって大切である。

金魚すくいの「ポイ」の紙には厚さの規格があり、五号は紙が厚く、七号はとても薄い。夜店では小さな子にポイ

を受け取ってもらって使うのがコツである。

『氷室』2017年9月号掲載

季語つれづれ 番外（二二） 尾池和夫

【野分】 野分後 夕野分 野分雲 野分晴

秋の暴風のこととて、とくに二百十日や二百二十日前後に猛烈な風が吹くことが多いと言われる。野分のあとの景色に風情があると描かれてきた。

【二百十日】 厄日 二百二十日

立春から二百十日目の九月一日前後が二百十日である。

野分は、明治から使われるようになった熱帯低気圧による台風とは異なる概念の暴風で、江戸時代の文学や俳句に季語としてよく登場するが、枕草子や源氏物語など、平安時代にすでに登場した。『枕草子』では「野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。立葩（たてじとみ）、透垣（すいがい）などの乱れたるに、前栽（せんざい）どもいと心苦しげなり」とある。また、『源氏物語』では第二八帖の題が「野分」で、光源氏三六歳の秋、八月のある日、激しい野分が都を吹き荒れる六条院を舞台に描かれる物語である。

二百十日は、八朔（旧暦八月一日）や二百二十日とともに、農家の三大厄日とされる。奈良県大和神社で二百十日

前三日に行う「風鎮祭」、富山の「おわら風の盆」など、各地で風鎮めの祭が催される。この頃、稲の穂が出る次期に当たっており、強風が吹くと収穫量が減るために注意を喚起する意味であるとも言われる。

統計では、八月末と九月中旬に台風襲来の山があり、二百十日頃の襲来は非常に少ない。

『氷室』2017年10月号掲載用

季語つれづれ 番外 (二三)

尾池和夫

【鳥兜】 鳥頭

中国原産のキンポウゲ科の多年草で、薬用、切り花用として栽培されているが強い毒があることでも知られている。

九月、茎頂や葉腋に花序を出し、たくさんの濃紫色の花を咲かせる。その花が舞楽の常装束で用いられる冠物である鳥兜（鳥甲）に似ている。

鳥兜の花言葉には、騎士道、栄光などのほか、厭世家、復讐などもある。英語でもmonkshood（修道士の頭巾）と呼ばれることから人嫌いの花言葉が生まれた。ギリシア神話の魔術の女神「ヘカテー」を司る花で、庭に埋めてはならない。

鳥兜は草全体が有毒で、特に根の毒性が強い。十勝アイヌは、毒性の強い「オクトリカブト」と唐辛子を調合して、

十勝石の矢じりに塗り、熊などを捕獲する術を使った。毒成分はアルカロイドで、哺乳動物の中枢神経を麻痺させ、末梢神経をまず興奮させた後に麻痺させる。根を乾したものは烏頭（うず）とか附子（ぶし）という。

北海道などでは道ばたにも生えており、山岳地帯に入れば何処にでもあり、いつでも誰でも採取できる。山菜好きの俳人は、熊と烏兜についての知識を身につけた上で、山に入ることが特に重要である。

薬効としては、根は漢方で必須の薬物であり、衰弱した体力への強心薬、あるいは鎮痛薬として偉大な効果を發揮するが、扱う医師の知識と熟練とが特に要求される。

『氷室』2017年11月号掲載

季語つれづれ 番外（二四） 晩秋 尾池和夫

【銀杏ぎんなん】 銀杏の実

銀杏（いちじょう）の樹は、中国の天目山で氷期を生き残ったものが世界に広まった。雌雄異株である。銀杏は街路樹にも多い。種皮の悪臭を処理するために重機が出勤して揺すって落とし、市民が拾って銀杏（ぎんなん）にしている地域もある。

ぎんなんは栄養価が高い。でんぷん、カロテン、ビタミンCなどを含み、ミネラルも豊富で骨を作るのに欠かせな

い成分が多い。七訂日本食品標準成分表では、可食部一〇〇グラムあたり、カリウムは五八〇、マグネシウム四五、リン九六、鉄一・二（各ミリグラム）を含む。

中国や日本では古くから、ぎんなんは民間療法で活躍しており、咳や痰、夜尿症に効くと言われる。一方、食ベすぎには注意が必要で、ビタミンB6の作用を妨げるメチルピリドキシンが含まれている。食ベ過ぎると痙攣など、中毒症状が起きることがある。幼児は解毒能力が弱いので特に注意が必要である。

買うときには、色が白くて大きく表面が滑らかなものを選ぶ。殻のまま紙袋に入れておくと冷蔵庫で二週間は青い実で食べられる。金槌で殻を割り、塩とともに茶封筒に入れ、電子レンジで一分ほどのおつまみになる。丁寧な鍋で煎ると綺麗に仕上がる。土瓶蒸し、炊き込みご飯、茶碗蒸し、串焼き、串揚げなどが日本では定番、中国では炒め物に加える。ウェブサイトのとくさんのレシピには季語が満載である。